

# 1960年代の岐阜県中津川市における 労音運動とレコードコンサート

山田晴通

山田(2021)で検討した、岐阜県中津川市にかつて存在した中津川労音については、機関誌『中津川労音』（および前身の『中津川労芸』）の復刻版(東谷 編, 2021)が出版され、従来より踏み込んだ検討がしやすくなった。筆者は、この復刻版の編者である東谷とともに、当時の関係者への聞き取り調査を重ねているが、その中で時折話題にのぼるのが、1960年代後半において労音が組織化への取り組み(いわゆるオルグ)のためにしばしば開催していたレコードコンサートである。

ハイファイを謳うようなステレオ再生装置が一般家庭に広く普及するようになったのは、概ね1960年代から1970年代はじめにかけての高度経済成長の後半のことである<sup>1)</sup>。それより以前、レコードを高音質、大音量で再生する機会は家庭の中に囲い込まれておらず、公共的な空間の中に置かれていた。こうした時期、特に1950年代から1960年代にかけて、しばしばおこなわれた行事が、レコードコンサートであった。

後述するように、レコードコンサートという実践も、言葉も、いち早く1920年代から存在していた。また、1980年代以降には、CD(コンパクトディスク)を筆頭に音楽に関する面でもデジタル機器の普及が進み、(CD等ではなく)アナログ盤を鑑賞する行事という新たな含意が「レコードコンサート」に付け加えられ、新聞記事でも、もっぱらその意味で用いられる場合が多くなっている。しかし本稿では、中津川労音が活動していた1960年代後半を中心に、それに至る1950年代から1960年代にかけての時期に焦点を絞ってレコードコンサートの様態を捉えていきたい。

耐久消費財としてのステレオ・プレイヤーが本格的に普及していく1970年代に先んじたこの時期は、戦後の高度経済成長期の只中にあり、55年体制の下で安保闘争などに象徴される「政治の季節」でもあった。その大きな構図の中で、労音は成立し、急速に拡大し、やがて急速に衰退していったのである。

以下では、まず「レコードコンサート」という表現で言及される実践の概要について、おもに新聞記事データベースなどを用いて確認する。次いで、戦後の中津川市における文化運動の中で、レコードコンサートがどのように位置付けられていたのかを、『中津川市史』(2012年)の記述を手掛かりに検討する。その上で、中津川労音が取り組んだレコードコンサートの実践について、機関誌の記述や当時の関係者への聞き取りをもとに明らかにしたい。

## I. 新聞記事データベースにみる「レコードコンサート」

「レコード音楽を集まって鑑賞する会」としてのレコードコンサートは、実態としても、表現としても、SP 盤と蓄音器の時代であった 1920 年代初めから存在していた<sup>2)</sup>。最初期のレコードコンサートは、教会や会館などを会場におこなわれ、もっぱらクラシック音楽のレパートリーが取り上げられていた。新聞記事データベースを検索してみると、読売新聞のヨミダス歴史館では、最も古い記事として、1920 年 11 月 6 日付の「蓄音器音楽會」というベタ記事が見つかり、「今六日(土)午後六時から、芝園橋統一教會内に於いて近く醫科大學に昇格すべき慈恵會醫院醫科専門學校ミュージックソサイテイ主催で、慈善蓄音器大音楽會が行はれます、…會費は五十錢。」などとある。またこれに次ぐ 12 月 4 日付の「樂聖記念音楽會」には「三島章道子を團長とする千駄ヶ谷青年團では樂聖ベートウベン百五十年を記念するために最近パリーから歸朝された本野子の蓄音機レコードを借りて千駄ヶ谷市民教會に四日午後七時から蓄音機音楽會を催す。入場随意」とあるが<sup>3)</sup>、これらの記事中には「レコードコンサート」の語は用いられていない。

用語としての「レコードコンサート」の初出は、1921 年 6 月 11 日付の「レコードコンサート」と題し、「京橋區數寄屋橋公園前の日本メソヂスト銀座教會では十一日午後七時から同會婦人會主催のレコード音楽會を開きます」と報じたベタ記事である。さらに、同年 11 月 29 日付「レコード演奏」は、「十二月一日午後七時から市ヶ谷の谷町教會で同じく六日千駄ヶ谷の市民教會で、文化青年會主催のレコードコンサアト『ロシアの夕べ』開催の筈。何れも近衛秀麿氏最近の選曲で…」などと報じており<sup>4)</sup>、最初期のレコードコンサートがしばしば教会を会場として開催されていたことがわかる。また、1922 年 6 月 30 日付「音楽界／レコードコンサート<ママ>」は「綜合社音楽部にては一日午後七時から京橋會館でレコード・コンサート<ママ>を催す。」とあり、この時点で「コンサート」という言葉が十分に定着していなかったことが示唆されている。その翌週の 7 月 5 日付「音楽界／名曲レコードコンサート」には「黒猫社では九日午後七時から京橋會館に名曲レコードコンサートを催す」とあり、さらに同月の 7 月 20 日付「レコード演奏」には「冬の俱樂部主催のレコードコンサートは<1 字欠>月二十二日午後七時から丸ノ内鐵道協會で開催する會<1 字欠>金參十錢」とあって、一般の会館などにおいてもおこなわれていたことがわかる。また、1923 年 6 月 26 日付「日比谷の新音楽堂祝いに民衆劇と講談を」は、「夜は六時からレコードコンサートを開き世界各國の名曲を披露する外…」と日比谷公園の音楽堂新築祝いの行事の一つとしてレコードコンサートがおこなわれることを予告している。同年 9 月の関東大震災の後、10 月 17 日付読売新聞「よみうり文藝欄」に寄せられた田辺尚雄の談話「レコードの配給は食物や衣服のそれと同じ事」には、「日本キリスト教青年團」が 9 月 29 日から「上野公園の假小屋で矢張りレコードコンサートを催してゐる」とあり、非常時においても文化が必要なことを示す象徴的な取り組みとしてレコードコンサートが言及されている<sup>5)</sup>。

昭和に入ると、新聞記事からレコードコンサートへの言及は激減する。しかし、レコードコンサートはレコードや蓄音機の販売促進策として利用されるようになっていたようである<sup>6)</sup>。さらに、太平洋戦争期には、新聞紙面からレコードコンサートへの言及は完全に姿を消すが、戦時下においてもレコードコンサートの実践が完全になくなったわけではなく、一部では続けられていたようである<sup>7)</sup>。

戦後の占領期になると、レコードコンサートは新たな形態で復活した<sup>8)</sup>。読売新聞では、戦後になると占領期のCIE図書館における行事についての告知記事や、レコード会社などによる新譜レコードコンサートの広告がしばしば見受けられるようになる<sup>9)</sup>。また、継続的に取り組まれたレコードコンサートの片鱗が伺える記事もあり、例えば、1954年6月19日付「LPレコードコンサート」には「私達の音楽愛好会では十九日夕五時半から台東区役所三階小ホールで第五十七回定期LPレコードコンサートを開く。解説志鳥栄八郎氏。…会費四十円。」とあり<sup>10)</sup>、公共施設における継続的な文化行事としてレコードコンサートが取り組まれていたことがわかる。また、この時期には、中等教育を中心に学校でも校内レコードコンサートが取り組まれていた(亀井, 1956: 杉山, 2012)。学校図書館がこうしたレコードコンサートで取り上げたジャンルは、クラシック音楽に限られず、一部ではジャズや映画音楽にも及んでいた(田辺, 1953: 杉山, 2012)。これらは不特定の市民に公開されていたわけではないが、やはり公共的空間に置かれた音楽鑑賞の機会であったといえるだろう。

さらに読売新聞では、1957年9月18日付「[東京オアシス] = 12完 無料レコードコンサート 静かな古典の世界」が、池袋の西武百貨店で毎日行われていた無料レコードコンサートについて詳しく紹介している。さらに、1965年8月21日付「労音レコードコンサートにも課税 品川税務署へ抗議騒ぎ」は、やがて入場税課税をめぐる一連の裁判闘争に至る初期段階の事件を報じたものだが、「昨年六月から品川文化会館小ホールを借り、毎月一回レコードコンサートを開き、ホール使用料にあてるため、一人五十円ずつを取っていた。」などとあり、当時の労音が取り組んでいた活動の一端が窺える。

朝日新聞のデータベースである朝日新聞クロスサーチ(縮刷版)では、1960年代を中心にレコードコンサートの告知記事が急増する。「レコードコンサート」を検索語としたヒット数は、1952年、1958年にそれぞれ1件あった後、1960年1件、1961年2件、1962年6件、1963年1件、1964年6件、1965年5件、1966年1件、1967年10件、1968年10件、1969年1件、1970年2件、1971年1件などと推移しており、朝日新聞社が主催しクラシック音楽の新譜レコードを取り上げた「朝日名曲の夕べ」、「朝日試聴室」などと題した行事や、東京文化会館で開催されていた「都民レコードコンサート」などの告知が目立つ。1960年代は、ステレオ装置の普及期にあたっており、ステレオやレコードのプロモーションを兼ねたレコードコンサートが盛んにおこなわれていたことが窺われる。

## II. 戦後の中津川市におけるレコードコンサート

新聞記事データベースの情報は、東京中心に偏りがちであるが、翻って中津川市のような地方都市においてレコードコンサートはどのように実践されていたのであろうか。ここでは『中津川市史』の記述から、関連する内容を確認していくこととする。

『中津川市史』によると、戦後の中津川市でいち早くレコードコンサートを開催したのは、文化新進会、中津音楽愛好会(通称 NMLS)といったクラシック音楽の愛好家たちの会であった。「手作り電器や手もちのレコードを持ち寄り」開催された SP 盤によるレコードコンサートは、文化新進会によるものが 1946 年 10 月に、NMLS によるものの第 1 回が 1949 年 9 月 13 日に開催された(中津川市, 2012, p.2019)。また、NMLS による取り組みとは別に、岐阜県公民館読書室が主催の「巡回レコード鑑賞会」が、1951 年 9 月 2 日に「涼しい名曲を尋ねて」と題して中津公民館で開催され、以降 1953 年 10 月まで、12 回の公民館読書室主催のレコードコンサートがおこなわれた(中津川市, 2012, pp.2019-2020)。

NMLS による第 1 回と第 2 回のレコードコンサートは、南小学校講堂で開催されたが、「広すぎたので、第三回以降はほとんどが役場二階ホールで行われた。時により三菱電機の「近又寮」(元梅信亭)の座敷で行われたこともあった。」という(中津川市, 2012, p.2019)。「広すぎた」というのは、集まる人数に比してという意味もあろうが、当時の蓄音器の性能が開放的な空間にそぐわなかったということであろう。また、当時は中津川キリスト教会でもレコードコンサートが開催されることがあったことも記録されており、こじんまりと閉じた空間がレコードコンサートに向いていたことがうかがわれる(中津川市, 2012, p.2020)。

1950 年代に入ると、レコードの規格はそれまでの 78 回転の SP 盤から、45 回転のシングル盤と 33 回転 1/3 の LP 盤、EP 盤へと移行していくことになる。中津川に新しい規格のレコードが入荷したのは 1951 年頃とされているが、当時は、レコードはあっても再生装置が普及していない状態であった(中津川市, 2012, p.2020)。『中津川市史』には、おそらく 1950 年代末の経験に基いて記されたものと思われる、次のような手記が紹介されている。

「当時どこの家にも LP をかける機械がない。楽器店の主人から「松竹館の向かいの田中喫茶店に行くと聴ける」と教えてもらい、早速飛び込んだ。初めて手にする LP 盤。恐る恐る見ると、テレフンケン盤で、ヴァイオリン・オイストラップ、指揮・コンヴィツチーニ、オーケストラ・ザクセン交響楽団とあった。マスターが「かけようか」と言ってくれたので、勿論かけてもらった。大型のコンソール型の電器で、半ば放心状態で聴いた。…」<sup>11)</sup>

さらに1960年代にはレコードのステレオ化が始まり、ステレオ再生装置について同様の事態が生じていたはずである。最新のオーディオ装置を備えていた公共的空間、例えば、上記の手記に言及されている田中喫茶店は、私的に所有されたレコードが、居合わせた人々に共有される場となっていたことであろう。

### III. 中津川労音におけるレコードコンサートの取り組み

中津川では、1963年に労働組合運動を母体として中津川勤労者芸術協議会(労芸)が組織され、これを改組する形で1964年10月に中津川勤労者音楽協議会(労音)が組織された。これは全国的な労音運動の高揚期における出来事であった(山田, 2021, p.16: 東谷, 2021, pp.307-308)。『中津川労芸』、『中津川労音』と題されたこれら組織の機関誌は、復刻版(東谷, 2021)が出されている。以下では、注記を含め、当時の中津川労音の機関誌へ言及する場合は、(発行年-月・No. 号数: p. 復刻版におけるページ)という形で参照する。例えば、(1965-6・No.16: p.128)は、1965年6月発行の機関誌第16号所収の記事で、復刻版のp.128にあたることを意味している。

他の労音組織と同様に、中津川労音においても、レコードコンサートは例会としてではなく、日常的なサークル活動としておこなわれていた。このため、機関誌にも予告が掲載されることは稀で、機関誌上には、おもに企画することを呼びかける記事や、サークル活動としておこなわれたものへの言及が掲載されていた<sup>12)</sup>。中津川労音の事務局が主体となって開かれるものは「労音レコ・コン」とか「中央レコ・コン」とも称されたが、回数は多くなかったようである。実際に開催されたレコードコンサートへの言及には、「好評」であったという肯定的な評価しか記されていない場合もあるが、集まった人数が記載されている記事を見ると、20人ほどから100人超までの規模で開催されていたことが察せられる<sup>13)</sup>。

例えば、「百十三人の参加 第二回労音レコ・コン報告」(1965-6・No.16: p.130)は、1965年6月4日にESSOホールで開催された「第二回労音レコ・コン」が、前回より多い113人を集めたこと、ステレオ装置が大惣楽器店から提供されたこと、会費100円が徴収されたことなどを伝えている。内容は、例会での来演が予定されていた東京キューバン・ボーイズなどであった。アンケートへの回答で今後の希望を問うたところ、クラシック17票、ポピュラー27票と回答があったといい、ポピュラー音楽のレコードコンサートへの支持が優勢ながら、クラシック系を求める根強い声があったことが示唆されている。

第1回のレコードコンサートへの言及は他には見当たらないが、上記の第2回の紹介記事には次回予告として1965年7月5日の「山のうた」のレコードコンサートの告知がなされている。したがって、最初期中津川労音が短期間のうちに3回のレコードコンサートを組織したことは確実である。しかし、その後、労音本体が主催するレコードコンサートへの言及はしばらく途絶え、ようやく1967年9月3日に「久しぶりの中央レコ・コン」

(1967-9・No.33：p.204)が「たなか喫茶店」で「会場いつばいの参加者」を集めて開催されたことが報じられた。内容は、フォークソングとピアノで、ポピュラーとクラシックの折衷的なものであった。そこには「昨年たびたび開かれていた頃の盛りあがりがあつて…」とも記されており、1966年中には「たびたび開かれていた」ものが、1967年に入ってから9月に至るまで開催されなかったことを「久しぶり」と称していることが察せられる。つまり、1965年から1966年にかけては比較的頻繁にレコードコンサートが開催されていたが、1967年はしばらく間が空き、以降は散発的な開催にとどまった、ということのようである。その背景には「中津川労音の発展のために 中津川労音第3回総会を終わって」(1966-10・No.27：p.178)が「レコード・コンサートを定期的に、特にクラシックなどを重点に実行していこう」という方針が、「特にクラシックなどを重点に」というところで、来演予定者をレコードで予習するという形態にそぐわず、空回りしたという事情もあったのかもしれない。

続いて10月15日には、「続・労音仲間の集い、高石友也の歌を聞こう」と題した「中央レコ・コン」が「たなか喫茶店」において会費100円で開催され、来演が予定されていた高石友也のほか、ジョーン・バエズ、ピート・シーガーのレコードがかけられた(「中央レコ・コン 友也の歌を聞こう」1967-11・No.34：p.208)。

また、「ROON あれこれ」(1970-3・No.48<「47」と誤記されている>：p.290)は、「太田町ゆう喫茶店にて労音レコードコンサートが開かれ」、約20名が参加したことが記されている。1960年代半ばの創業のゆう喫茶店は、創業者の糸井川修次がオーディオマニアで、いち早く最新のオーディオ機器を備えており、当時の労音関係者のたまり場の一つとなっており、これ以外にも記録に残っていないレコードコンサートの会場となっていた可能性がある<sup>14)</sup>。この会でも、やはり来演が予定されていた加藤登紀子と五つの赤い風船が取り上げられており、いわゆる予習の性格をもっていたことがわかる。ここでは「こういったレココン月に一度は開きたいものです。今度も「ゆう」で開く予定です…」と記されているが、既に活動の末期にさしかかっていた中津川労音に定例のレコードコンサートが維持できたかどうかは疑わしい。

サークル単位で取り組まれたレコードコンサートの中でも、特に熱心に取り組まれたのが、当時まだ中津川市に編入されていなかった坂下町を中心に組織されていた坂下支部であった(「サークルさんぽ 坂下支部」1968-11・No.40：p.242)。坂下では、時期ははっきりしないが、遅くとも1965年はじめには、笠木透(1937-2014)の働きかけを契機に、後に全日本フォークジャンボリーの実行委員として活躍することになる安坂洋勝(1938-2023)や松井隆康(b.1937)を中心に(東谷, 2022, p.26)、当時、坂下にあった喫茶店「初音(はつね)」をはじめ、各地の集会所や体育館で、労音への新たな会員の獲得を目指した事実上無料のレコードコンサートが積極的に組織された<sup>15)</sup>。ステレオ機材は、坂下の赤坂電器から無償で提供されていた<sup>16)</sup>。松井たちは、自家用車の後部座席に重いステレオ機材を積み込み、会場まで運んでいた。

安保洋勝によれば、坂下支部のレコードコンサートでは、クラシック音楽は扱われず、もっぱら映画音楽やフォークソングを含むポピュラー音楽のレコードを仲間内から集めてかけていたという。ただし、松井隆康によれば、クラシック音楽のレコードを多数持っていた南木曾町の楽器店の協力を得て、レコードコンサートを開催したこともあったというので、クラシック音楽がまったく扱われなかったわけではないようだ。

坂下では、1968年頃まで、オルグ活動としてのレコードコンサートがかなり頻繁におこなわれていた<sup>17)</sup>。しかし、支部独自の地域例会が本格化すると、活動の重点はその企画・運営などに移行し、レコードコンサートはおこなわれなくなったという。

## おわりに

レコードコンサートは、蓄音器の登場とともにおこなわれるようになり、特に一般家庭への音響機器の普及が十分ではない状況において、公共的な空間の中で実践された。ここでは、公共的空間にふさわしい、何らかの意味で社会的に好ましい音楽が選別されて提供されたと考えられる。クラシック音楽は、そのような文脈において、好ましい音楽として選択されやすかった。1950年代の中津川における音楽愛好団体などの取り組みも、そうした構図の中で理解されるものであった。

同様の事情は、労音の運動の文脈の中にもあった。そもそも労音は、その活動の初期にあたる1950年代から、例会とは別の日常的な組織活動として、クラシック音楽を中心としたレコードコンサートの開催に取り組んでいた。例えば、1954年に結成された広島労音では、当初からレコード鑑賞の機会が提供されており、「レコード・コンサート」は、「歌唱教室や合唱団、各種研究会など」とともに「音楽の理解を深める一つの運動」と捉えられていたが、その対象はクラシック音楽であった(能登原, 2015, p.9)。

家庭用のステレオ再生装置の登場は、1950年代末のことであり、その普及は1960年代を通して進んだと考えられる。そうだとすると、労音運動が高揚し、中津川にも及んだ時期、中津川労音がレコードコンサートに取り組んでいた1965年から1970年にかけての1960年代後半は、既にステレオ装置が普及し始めたタイミングにあたっていたはずである。もちろん、普及の進み方には全国的にみて地域差があり、大都市部に比べて中津川市なり坂下町のような地方では普及が多少遅れていた、といった事情があったのかもしれない。

いずれにせよこの時期に、中津川市や坂下町では、労音のサークル活動としてレコードコンサートが取り組まれたわけだが、そこでおもな対象となったのは、クラシック音楽ではなく、例会への来演予定者に関係する音源を中心としたポピュラー音楽のレコードであった。中津川労音は、方針としてクラシック音楽重視を打ち出した場面もあったが、実践としてはそれを貫徹させることはできなかった。その背景には、会員の間にあった(アンケートにも表れた)ポピュラー音楽への強い支持とともに、取り上げるレコードの調達

という課題もあったものと思われる。

中津川労音がレコードコンサートを主催するといっても、そこでかけられるレコードは中津川労音事務局が所有しているものばかりではなかった。事務局が所有しているレコードはごく一部の限られたものであり、そのほとんどが来演予定者のプロモーション用にもたらされたものであったと考えられるからである<sup>18)</sup>。例会への来演を前に、レコードコンサートによって、いわば予習するという形態は、組織しやすい面もあったはずである。それ以外のレコードは、関係者が持ち寄るようにして調達されていたのであろう。

さて、ここで検討している1960年代後半という時期から時代を下り、1970年代後半以降になると、ソニーのウォークマンを嚆矢とする携帯可能な音響再生機器の普及によって、「一家」というライフスタイルから「個」というライフスタイルへの移行<sup>19)</sup>が起きることが指摘されている(水原, 2007, p.9)。しかし、「一家」で音楽を享受するという段階の実現に先んじて、家庭という私的領域に囲い込まれる前段階として、公共的空間に置かれた音楽を、いわば「共同体」として享受するという局面があったことを、レコードコンサートの歴史は示唆している。

特に坂下町では、オルグ活動としてのレコードコンサートを通じて、また、それ以外の人脈なども通して形成された共同体としての中津川労音坂下支部が、次に支部例会の企画・運営に注力して高石友也らと接点を持つようになり、それがやがて全日本フォークジャンボリーの実践へと展開していった。それはまさしく「中津川労音に集った「名もなき人々」の文化実践」に他ならなかった(東谷, 2022, p.32)。そこでレコードコンサートが、共同体を組織する上で有効な手法として機能した背景には、ステレオ装置やレコードの普及が完成する直前、また、ポピュラー音楽の台頭といったタイミングが大きな意味をもっていたと考えられる。

#### 注

- 1) 日本ラジオ博物館のサイトにある「ステレオ電蓄の流行と普及 1958-73」を参照。https://www.japanradiomuseum.com/stereo1.html
- 2) コトバンクによると、当時の新語を解説した田中(1928)『近代新用語辞典』に、「レコードコンサート」の項があり、「『名』(record concert) レコード音楽を集まって鑑賞する会。」とあるという。https://kotobank.jp/word/レコードコンサート-661544
- 3) 「三島章道」は、作家で子爵の三島通陽(1897-1965)の筆名。「本野子」は、外交官で子爵の本野盛一(1895-1953)。「千駄谷市民教会」は、1919年に千駄ヶ谷に設立された東京市民教会のことで、下北沢に現存する東京都民教会の前身。
- 4) 近衛秀麿(1898-1973)は、作曲家、子爵。
- 5) 田辺尚雄(1883-1984)は、音楽学者。
- 6) 例えば、津上(2020, p.111)によれば、1930年には、声楽家・永井郁子(1893-1983)の長野県上田市における独唱会に先んじて「上田市内の蓄音器商組合」が「永井郁子レコードコンサートを開始するといふ」という上田市の地元紙『北信毎日新聞』の予告記事があり、「蓄音器商組合が好機を逃さずにキャンペーンを張ったことが知られる。」
- 7) 例えば、熊本市の(旧制)第五高等学校の校友会雑誌『龍南』に掲載された山本(1942)は、五高に

において1941年に「一台の電機蓄音機が購入されたのである。かくして年に数回乃至十数回は優秀なるレコードを通じて正統派の高尚な音楽が紹介される事になった」経緯を記しており、太平洋戦争開戦前後の時期にも、ドイツのクラシック音楽を中心にレコードコンサートがおこなわれていたことがわかる。

8) 村田(1949, p.49)は、クラシック音楽を前提としたレコードコンサートの手引きであるが、「まえがき」を「レコード・コンサートは戦後各地で盛んに行われている。私も毎月数回は話に招かれてコンサートを司會するが…」と書き起こしている。村田武雄(1908-1997)は音楽評論家、音楽史学者。

9) ヨミダス歴史館の検索では、ビクター新譜コンサートの広告が、1950年5月24日付をはじめ、1951年2月20日付、11月22日付、1952年3月21日付の4件、コロムビア洋楽愛好会レコードコンサートの広告が、1950年9月12日付の1件見つかり、会場はいずれも読売ホールとなっていた。いずれも予告された内容はクラシック音楽である。

一方、ヤマハが山葉ホールで開催していたレコードコンサートは、クラシックのみならずポピュラー音楽も扱っており、1954年8月16日付の広告でジャズが予告されているのをはじめ、11月17日付では4日間の開催日ごとにクラシック、ポルテニヤ、シャンソン、ジャズの4ジャンル、1955年1月22日付では同様にクラシック、ポルテニヤ、シャンソンの3ジャンルが予告されている(ポルテニヤは、プエノスアイレスのアルゼンチン・タンゴ)。このヤマハの広告は、ポピュラー音楽を内容とするレコードコンサートへの言及としては、管見する限り、新聞記事ないし広告としては最も早い時期のものである。

10) 志鳥栄八郎(1926-2001)は、音楽評論家。

11) 『中津川市史』執筆者に名を連ねる安保昭夫の手記。「楽器店」とあるのは、おそらく大惣楽器店(現在のダイソー楽器)のことであろう。田中喫茶店は1953年創業、現在も「喫茶たなか」として営業しているが、改築を経ており往年の面影はない。

なお、「ヴァイオリン・オイストラフ」とあるのは、ダヴィッド・オイストラフ(1908-1974)、「指揮・コンヴィツチーニ」はフランツ・コンヴィチュニー(1901-1962)のことであろう。

12) 例外的に機関誌に掲載された「[山のうた]レコード・コンサート」(1965-6・No.16:p.128)の告知によると、会場は東小学校講堂とあり、SP盤時代との違いを感じさせる。

13) 参加者数への言及があるのは、「百十三人の参加 第二回労音レコ・コン報告」(1965-6・No.16:p.130)のほか、「中央レコ・コン 友也の歌を聞こう」(1967-11・No.34:p.208)、「ROONあれこれ」(1970-3・No.48<「47」と誤記されている>:p.290)で、後二者にはそれぞれ「二一名」、「約二十名」が参加したことが記されている。

14) ゆう喫茶店は、1970年代前半に、当初の場所から道を挟んだ反対側の位置に移転し現在も営業している。旧店舗から引き継がれた1960年代当時のスピーカーなど音響装置一式は、今では稼働していないが、インテリアとして店内に残されている。

15) 「ほうほうでレコ・コン 好評また好評」(1965-4・No.14:p.116)には、「どこで開かれるのか。坂下支部で、労金サークルで、林野サークルで、六区婦人の集いサークルで、また、エッソホールで交流会を兼ねて、というふうに、…」とあり、この時点で坂下支部の活動が突出していたことが窺われる。また、「サークルさんぽ 坂下支部」(1968-11・No.40:p.242)には「坂下中心部と、周辺の山口、川上、三留野などでレコード・コンサートを開いて会員交流に役だっている。」とあり、坂下支部が周辺の町村へのオルグ活動として、県境を越えて長野県側の山口村(後に2005年に県境を越えて中津川市に合併)や南木曾町まで、積極的にレコードコンサートを展開していたことが窺える。

16) 松井隆康によると、当初、宣伝になるとして好意的に無償でステレオ機材を提供してくれた赤坂電器の店主が、あるとき松井の勤務先の恵那信用金庫坂下支店へやってきて「わしはお前に騙

された。おぬしらはアカカ」などと罵倒されたという。松井は丁寧に事情を説明し、店主も納得してその場は収まり、赤坂電器はその後も機材を提供したという。労音に対する当時の社会的イメージの一端を物語るエピソードである。

- 17) 松井は、最も頻繁にレコードコンサートが取り組まれていた時期について、隔週くらいで開催されていたような覚えがあるとも回想しているが、流石にこれは誇張であろう。
- 18) 「ほうほうでレコ・コン 好評また好評」(1965-4・No.14 : p.116)には、「労音所有録音盤目録」として「○フランク永井 アット、ローオン 大阪労音実況録音 ○坂本スミ子は歌う ○キューバン・スペクタクルス その他多数」という記載がある。坂本スミ子、東京キューバン・ボーイズは、いずれも直前に例会での来演が予定されていた。
- 19) 水原(2007)の議論は、戦前の蓄音器の普及の段階で、音響装置が「家庭所有」となったことを前提としているが、蓄音器がその当時において相当の贅沢品であり、一般家庭への普及には限界があったことを考慮すると、単純に過ぎる議論であるように思われる。ウォークマンの登場前後の対比が主題である水原の議論に対して、無い物ねだりを承知で言えば、「家庭所有」が実現する前段階として、本稿で検討しているような、公共空間に置かれた音響装置と音楽体験についての考察が求められるところであろう。

## 文献

- 亀井昇三(1956)：校内定期レコードコンサートの運営と実際，教育音楽，11 (12)，pp.22-29.
- 杉山悦子(2012)：1950年代の音楽科鑑賞教育とメディア：「レコードコンサート」の実践より，日本教育学会大会研究発表要項，71 (0)，pp.304-305.
- 田中信澄 編(1928)：『近代新用語辞典』修教社書院。[未見]
- 田辺久之(1953)：レコードを通しての図書館活動，学校図書館，33，pp.32-36.
- 津上智実(2020)：永井郁子と宮城道雄：共演の実態と意義，神戸女学院大学論集，67 (1)，pp.97-114.
- 東谷護(2022)：1960年代の「名もなき人々」の文化実践を考えるために：中津川労音に持たれたイメージを手がかりとして，mixed muse(愛知県立芸術大学)，17，pp.23-35.
- 東谷護 編(2021)：『復刻 資料「中津川労音」』風媒社，358ps.
- 中津川市 編(2012)：『中津川市史 下巻現代編Ⅱ』中津川市.
- 能登原由美(2015)：機関紙にみる広島労音：発足から十年の歩み，広島市公文書館紀要，28，pp.1-13.
- 水原紹(2007)：ランドマーク商品としての携帯オーディオ機器：ソニーのウォークマンの事例を中心に，社会科学(同志社大学)，78，pp.1-21.
- 村田武雄(1949)：レコード・コンサートの手引，レコード音楽，19(2)，pp.49-64.
- 山田晴通(2021)：1960年代の中津川労音における公演者：地方小規模労音の夢と現実，パラゴネ(青山学院大学)，8，pp.16-33.
- 山本洋(1942)：「レコード・コンサート」開催に就いて，龍南，251，pp. 68-70.

本稿は、筆者が東谷護・愛知県立芸術大学教授と共同でおこなっている、岐阜県中津川市における調査の成果の一部である。文中で明示的に名前を上げていない方々を含め、調査にご協力いただいた方々に感謝を申し上げます。文中敬称略。

本稿は、筆者が代表となっている科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)「マス・メディアに依存しないポピュラー音楽の伝播に関する民族誌的研究」(JSPS 科研費 JP20K00219)の成果の一部である。